

港町の発展で意気揚々としていた。それが、敗戦で家も土地も財産も、商売の権利までも失って裸一貫となった。父の青年期から壮年期の苦労も、水泡に帰した。父は、骨を大陸に埋めるつもりであった。私もまた、学業を終えて満鉄に入り、満州平野を縦横に駆け回る計画であった。人生計画、大陸への夢は破れた。

## 北朝鮮の空、父は遠くに！

長崎県 木村 繁

### はじめに

春爛漫、どこまでも青く澄んだ長崎の空、小鳥が家の近くでチツチツと鳴きながら、楽しそうに飛び交っている。家の中からガラス越しに庭の盆栽に目をやると、緑の色が大分濃くなってきた。今は、妻と二人で定年後の人生をのんびりと元気に過ごしている。平凡だが幸せに暮らしているのは、自分たちの努力の結果でもあるけれど、もつと奥深い我が国の歴史にあることに気付く。日清、日露戦争、さらに大東亜戦争が勃発し、欧米の列強国を相手に戦うことになった。ときに昭和十六（一九四一）年十二月八日であった。

少年時代の私は、清津府北星町の我が家で軍艦マーチと共に流れてくる大本営発表をラジオで聞いて、子供心に日本の軍隊は世界一強いんだと感

じていた。しかし約四年続いた戦争は、大変な数の尊い命を犠牲にしながら敗れてしまった。アメリカ進駐軍と共に、民主主義というものが入ってきて、マッカーサー憲法とも言われる新しい憲法の下、高度経済成長と相まって繁栄の一途を築いてきた。様々な家電製品に囲まれて、後進国から見るとかなり高度な文化生活を営んでいる。それは前にも述べたように、多くの国民が国のためと言われて落とした命と、流した血の上に成り立っているとは思えない。私たちは国内外で戦争の犠牲になった軍人、軍属、原爆被爆者、そして多くの民間人の方々にいつまでも感謝の気持ちをお忘れず、ただただご冥福を祈りながら、知恩報恩の精神で日々を大切に生きたい。

### 一 生い立ち

私の両親は二十代に結婚。朝鮮咸鏡北道清津府北星町十八番地に居を構えて、精肉店を開業した。一番上の兄、秀四郎は清小から羅南の中学へ、次の兄、龍之助は清小から清津公立水産学校へ進み、

卒業前に奈良の航空隊に予科練習生として入隊した。三番目の私は、昭和六年十一月二十三日清津府北星町で生まれ、清津公立国民学校から、清津公立工業学校採鉱冶金科に入学した。二人の妹は小学生、一番下の弟、幸弘は五歳だった。終戦当時私は工業学校二年生だったが、厳しい戦況の中、毎日わずかな米粒に刻み大根をたくさん入れた大根粥しか食べられなかった。だが、暖かい家族の絆で結ばれ、幸せに暮らしていた。それに、近所のおじちゃん、おばちゃん、お兄ちゃんやお姉ちゃんたち、みんな優しくかった。そして、いたずら坊主の大勢の男女の友だちなどと本当に子供時代と一緒に遊び、学んだ十四年間だった。馬乗り、缶蹴り、こま回し、自転車輪ころがし、かくれんぼ、探偵ごっこ、石蹴り、天馬山下の海水浴、銅貨銭を薄い紙で包み足の内側で蹴り上げるチョンギ、清津の山々に咲いていた鈴蘭の白い花、白樺の木、そして校庭の端に並んでいたポプラの木など、数々の思い出が今も鮮やかに

頭の中をよぎる。

## 二 ソ連の参戦と終戦

そんな懐かしい生まれ故郷の清津の町に、大変なことが押し掛かってきた。昭和二十年八月九日のソ連軍の突然の参戦のため、日本人のすべての暮らしが一変した。艦砲射撃と空襲、機銃掃射で、清津の町は大混乱に陥った。近くのマンホールに逃げ込んだが、敵の上陸が始まるとの情報が広まり大勢の住民がリュックサックを背に、子供やお年寄りの手を引きながら山奥へと逃げ出した。また、清津の駅は南下しようとする群衆が列車に殺到して、大変な騒ぎになっていると聞いた。

私の家族もほかの家族二十数人と一緒に、ソ連軍の攻撃から身を守るために、北星町の山に掘られた陸軍砲部隊の防空壕に入り、息を潜めてじつと外の様子をうかがっていた。十三日から十四日の夜にかけて、防空壕の出入口から清津の市街地を見下ろすと、港付近と天馬山の軍施設が盛んに燃えており、清津の空全体が真っ赤に染まってい

た。私は、体が震えるのを止めることができなかった。ほかの防空壕では、ソ連兵が投げ込んだ手榴弾で多くの民間人が爆死したが、私たちはソ連兵にひきずり出され、両手を高く上げたままの姿勢で港の倉庫に收容された。いろいろ取り調べられたが、女、子供が先に釈放され、福泉町の空き家に落ち着いた。そこで日本が降伏したという情報を聞いた。思い起こせば、六十年も前の出来事ではあるが、我が国にとっても私たち一人ひとりにとっても、大変な運命の分かれ道に立たされたのだった。

八月二十日ごろになると、散り散りばらばらになつていた人たちも福泉町に集まってきた。二百数十人ぐらいになった。日本人会を作り、引揚げまでの共同生活が始まった。食べる物は何もなく、麦穂の丈を長時間煮て、それをプツン、プツンと噛んで食べていた。味も栄養も何もなく、みじめな暮らしが続いた。

そんなある日の昼間、何を誤解したのか、ソ連

兵と朝鮮人の暴民が我々の家をめがけて発砲し、運悪くそのうちの一発が私の右腕を貫通した。家中に響く音で、自分が負傷したことも分からなかった。そのうちに、柱に寄り掛かっていた体の肩から腕全体にかけて、熱湯をかけられたような痛みを感じた。よく見ると、指先から流れる真っ赤な血が畳に広がっていた。私は撃たれたことに気付くと、とたんに激しい痛みを感じて、裸足で裏口から外に飛び出した。「かあちゃん！ かあちゃん！」と泣き叫びながら、母を探して走っていた。それを見た、人の良さそうな朝鮮の人が、自分の着ている白いシャツを裂いて、私の腕の付け根をきつく縛り、病院のような所に連れて行ってくれた。

そこでは私を朝鮮人と思ったらしく、朝鮮語でいろいろと語りかけてきたが、私は全く言葉が分からずに黙っていたので、すぐに日本人と分かり、治療もせずに外に押し出されてしまった。外に出されたとたんに、今度は数十人の朝鮮人の群衆が

取り囲み、棒切れや竹箒でこぶき回して、どこまでもついてきた。やっとの思いでソ連軍の野戦病院を探し当てて、軍服を着た女医さんに治療をもらった。その女医さんは、本当に優しく治療をしてくれた。その顔は今でもよく覚えていて、感謝の気持ちでいっぱいだ。

八月の焼けつくようなアスファルトの道を裸足で歩き回り、福泉町の日本人の居場所を尋ね歩いた。やっとな朝鮮系ソ連兵の通訳に会って、港の倉庫付近に行けと言われ、それからさらに一時間ぐらい探し歩き、やっとな皆に会うことができた。

すぐ下の妹の幸子が、母に「繁ちゃん、鉄砲で撃たれて死んだよ！」と言っていたので、母は肩から手の先まで包帯をぐるぐる巻いて、ひよっこりと現れた私の顔を見るなり、顔を手で覆って泣いた。弟の幸弘を抱いていた母は、黙って私を横に座らせた。胸が詰まったのであろう、何の言葉もなかったけれど、母の表情は「繁ちゃん！

死なずに本当に良かったね！」であった。

こんな出来事もあった。まだ私の負傷も回復していないころ、母たちと並んでいたところ、私たちの前二メートルぐらいの所に、日本軍の捕虜の一団が、軒下に膝を立て横一列に並んで坐っていた。その中の一人の白い足が目に入った。その膝から足首までが、なぜかもやもやと小刻みに動いている。変な足だなと思って少し近付いてみた。とたんに、私の頭から血の気が引いた。生まれて初めて目にした異様な光景だった。長さ一センチメートル以上もある大きな真つ白な蛆虫が、押し合いへし合い上下左右に上ったり下りたりしてうごめいているのだった。所々に蛆虫の隙間から針の先ぐらいにちらちら見える赤い色、それは恐らくソ連軍との戦闘のときに負傷して、足の皮が全部剥がれた真つ赤な血肌だった。その血をなめながら、何百何千か見当つかない蛆虫が足全体を覆い尽くしてうごめいていた。その兵士も為す術もなく、ただ口をすぼめて「ふーふー」と息を吹

きかけて、吹き飛ばそうと懸命に努力していたが、何の効果もないようだった。その様子を息をひそめて見つめていた私も、そのうちにいつの間にか眠り込んでしまい、目を覚ましたときには前にいた兵士の一団はいなくなっていた。どこに連れていかれたのか？あの負傷して蛆虫が取り付いている若い兵士は、痛む足を引きずりながら歩いて行ったのか、内地の家族の顔を思い浮かべながら、早く帰りたいと思っていただろう。そして早く帰してくれという情念はいかばかりだろうか、身につまされるようであった。あれから六十年、あの兵士の顔は忘れたが、あのとときの小さく波打つようにうごめいていた白い足肌だけは、今でも眼底に鮮明に残っている。

その後、日本人会では、通訳の吉森さんがソ連軍とコンタクトを取り、働ける者は清津の港にできたソ連軍基地で働くことになった。一日に米五合が日当だったが、母はその日当の米を少しずつ貯めては、朝鮮人に売って生活費にしていた。父

と母と私が仕事に行き、妹弟たち三人は家にいた。働きながら、必ず皆で日本へ帰れる日を楽しみに、日本人会の中で一生懸命力をあわせて生活した。しかし引揚げを間近にして病に倒れ、故国の土を踏むことなく北朝鮮の地で亡くなった同胞もおり、その方々のことを思い出すたびに胸が痛くなる。同窓の菱沼さんのお父さんも、父も夢を叶えることもなく悲痛の思いで家族に別れを告げ、町並みが見える八十八カ所と呼ばれる山に淋しく眠っている。既に土になつていと思うが、子供心にも悲しみとやるせない気持ちで、まさに断腸の思いだった。

### 三 父の死と清津脱出

父は昭和二十一年の初夏、福泉町の家で生活していたとき、過労のために病気になる、床に臥せてしまった。医者も薬もなく、病気はどんどん悪化していった。ある日のこと、床に寝ていた父が弱々しい声で母に何か話をしていった。私も近くに寄って話を聞いたが、父は「自分はもう駄目だか

ら、お前が四人の子供を連れて長崎に帰ってくれ。長崎には私の兄や弟たちがいるから、皆の行く末について力を貸してくれるだろう」と言った。母は、それに対して泣きながら「父ちゃん、何を言ってるの。あんた一人を残して、どうして自分たちだけで日本に帰れるの。気をしっかり持って一緒に帰ろうよ」というようなことを母は言っていた。病床の父の目には涙が光っていたし、母もまた泣いていた。それはまさに夫婦の絆、親子の絆を断ち切られる悲しい別れに対し、悔やんでも悔やみきれない無念の涙だったかもしれない。それから後のある夜、私たちが子供四人がぐっすり寝ていると、母に突然起こされた。「父ちゃんが変だよ」と言う母の必死の顔。私たちは、為す術もなく父の顔を見ているだけだった。妹たちが大声で泣き出した。四畳半の暗い裸電球の下で、母と子供に囲まれて、やがて父は五十二歳の生涯を終えた。今でも異境の地に一人淋しく眠っている父。どれほど悔しかったことか。まさに痛恨の極みで

あつたろうと思う。父の遺体は、日本人会の方々によって山の松林の中に丁寧に埋葬された。本当に悲しかった。本当につらかった。

やがて秋も近くなったころのある夜に、日本人会の大人の方たちが、ばたばたと引揚げの支度を始めた。私の家族もリュックサックに入るだけの着替えを詰めると、ソ連軍のトラックで清津の港に運ばれた。そしてダンベ船の魚倉に押し込まれ、ポンポン船にロープで曳かれながら、三十八度線越えを目指して出港した。

しばらくして沖合に出たころ、空が明るくなってきた。私はそのとき、甲板にいたが少しずつ遠く清津の町並みと山々、そして父が眠る八十八方所の山のあたりを、じっと目を据えて見つめていた。魚倉では母が顔に手を当て泣きじやくつている。自分の夫を、子供たちの父親を、長年暮らした土地清津に一人で置いてゆかなければならない身の悲しさか。私は「父ちゃん、さようなら」と、何度も心の中で叫んだ。人間だれでもいつか

手前で曳き船のポンポン船と別れて、自力で国境を越え、無事韓国側の注文津の砂浜に上陸した。

#### 四 米軍キャンプと引揚げ

そこには米軍による日本人引揚者を収容するキャンプがあり、テントが多数張られていた。虱取りのためにDDTを掛けられて、毎日豆の缶詰だけの生活が始まった。キャンプ地は大変美しい砂浜で、私は友人数人と海水浴をして楽しんでいた。ときおり、米兵が、砂浜に腹這いになって小銃でカモメのねらい撃ちをして楽しんでいた。

収容されて十日以上経ったそんなある日、一人の男の子が泳いでいる最中に沖を指さして「船だ！ 船が迎えに来た！」と大声で叫んだ。日本からの引揚船「黄金丸」だった。「やっと日本に帰ることができる」とすべて日本人の間に、喜びと安どの渦が巻き起こった。少し沖合に停泊した黄金丸までは、米軍の上陸用舟艇で運ばれた。

引揚船は一路博多港へと白波を立てた。気が付くと、船室のスピーカーからは女性の歌声が流れ

は、悲しいけれど命果てる。だけど、また皆一緒にどこかの世界で逢えるからと念じていた。船は、次第に清津の町から離れてゆく。私は、いつの間にか口の中でつぶやいていた。「父ちゃん！ 連れて帰られずごめんさい。一人残してごめんさい」と何度も何度もつぶやいた。やがて遠くの水平線から、真っ赤な太陽が顔を出してきた。その鮮やかな色が一直線に私たちの船の所まで届いていた。夜明けの美しい空に、白いカモメや真綿のような雲、そして青い海に細長く突き出た陸地に真っ白い灯台、釣りや船遊び、海水浴などで楽しかった清津の港も、いつの間にか哀愁の涙の先に霞んでしまった。本当に今でもあのときの風景は、一幅の絵のように私の脳裏に焼きついている。生まれて終戦までの、十数年の歳月を送った私たちの町、人、港、山並み、輪城川、それぞれの学舎など再び会うことがあるだろうか。いろいろな思いが錯綜して、涙が止まらなかった。

次第に船は沿岸沿いに南下して、三十八度線のていた。それは「蘇州夜曲」だったと思う。私にはすごく切なく聞こえた。無数の人々の死を悼む挽歌に聞こえた。数多くの国民がすべての財産と尊い命を失って、今愛着の地に別れを告げてそれぞれの故郷へ向かっている。必死の思いで危機を乗り切りながら、内地にやっと帰れるという喜びがあったが、反面実に後ろ髪を引かれる思いもしていた。心の中は、鉛を飲み込んでるように重たかった。

やがて日本列島が横に長く連なって、薄墨の絵のように見えてきた。何時間かして博多港に接岸した。物心ついて初めて見た日本だけれど、私も母も心は全然弾まなかった。私たち親子五人は、大きな忘れ物をしてきたような気持ちだった。私たちが幼いときからいつも見ていた父親の背中が、そこにはなかった。厳しくて恐い父ちゃんだった。今では何もかも遠い昔のことになってしまったけれど、朝鮮咸鏡北道清津府北星町で生まれてからの十四年間は、一口では語れない数多くの思い出

が、今も胸の中に静かに生きている。

## 五 博多上陸

博多に上陸してやっとの思いで、母は私たち子供四人を連れて亡き父の願い通りに、本籍地の長崎県南高来郡小浜町富津の親戚の家にたどり着くことができた。多くの親戚の人たちに、母は泣きながら父を連れて来れなかったことをしきりに謝っていた。しかし、だれ一人母を責める人はいなかった。何もかも戦争のせいだと言って慰めてくれた。

それからは、ずっと多くの方々にお世話になった。食糧などの援助を受けて、生活を助けて頂いた。あの日のご恩は、いつまでも忘れることはできない。世話になった叔父さん叔母さんたちも、既に他界されていて一人もいない。淋しい限りである。ときどき墓所のある田舎の従兄弟たちの家に寄ると、昔と変わらずに大変良くして頂いた。本当に人の情というのは嬉しいものだ。

## 六 就職と母の死

しをした。息も絶え絶えのきつい仕事で、一回押しきって当時の金で百円をもらっていた。敗戦後の生きるためとはいえ、命を賭けて戦った敵国米兵に金で買われて、その連中が乗っている輪タクの後押しをして、何がしの金をもらって生活の足しにすることは、実に屈辱的で複雑な思いであった。

いくつかの仕事を体験しているうちに、佐世保市内の食堂の前を通ったとき「見習い募集」の張り紙が目につき、すぐに飛び込んで応募し、そこで住み込みで勤めることになった。それが、結果的に私の一生の飯の種の職業になった。三年ほどそこで働いて、叔母や弟のいる長崎市内に移った。そこで現在のグランドホテルの前身である精洋亭ホテルに入社することができ、以来四十六年間、料理一筋で人生の大半を送ることができた。

四人の子供を連れて、必死の思いで北朝鮮から九州長崎まで父の遺言通りに駆け抜けて、その目的を果たした母。母は引揚げ後も、一生懸命子

昭和二十三年ごろ、叔母の世話で熊本県球磨郡五木村に入り、ダム工事の測量班の一員として就職した。毎日測量の器械を背負って山また山の木を、鉋で伐採しながら前に進む重労働を十七歳から二十一歳までの四年ほど続けた。何度母や兄弟のいる長崎に逃げて帰ろうと思ったことか。しかし、当時は口減らしの意味が大きかったから、それもできないくらい毎日だった。やがて私たちの仕事も終わりに近付くと、今で言うリストラに遭い、少しばかりの退職金を手にして長崎へ帰った。当時は朝鮮戦争が始まっていたので、地元の人たちと一緒に佐世保に出て、米海軍基地内で弾薬運搬の沖仲仕をして暮らした。また、そのころの佐世保は米軍人相手の街娼（通称パンパンと呼ばれていた）であふれ、日本人の輪タク屋が米兵とパンパンを宿まで運んでいた。私たちは十人くらいで路端に直に座り込んで、輪タクが来るのを待っていた。米兵と女の乗った輪タクが来ると、順番に一人ずつ飛び出して、坂道を上る輪タクの後押

もたちの成長を楽しみに働き通しだった。その子供たちがそれぞれ巣立つのを見届けた安堵と老衰のため、平成元（一九八九）年四月一日、桜の花が舞い散る中、九十二歳で旅立った。子供たちに囲まれ、静かな旅立ちであった。母の姿形は消えても、魂は日本海を渡り遙か清津の山に眠る父の所へ飛んでいるだろう。そして四十数年ぶりの再会を、二人できっと楽しんでいることと思つた。

## 七 私の家庭

今年、我が家にとって早くも母の十七回忌を迎えた。三月には子どもたちと数人の親戚が集まって、無事に法要を営むことができた。私は結婚して四十五年、二人の子供も成長して、それぞれに最高の伴侶を得て幸せな生活をしている。上の娘は、雲仙岳の麓にある北串中学校の教頭職にあり、生徒の教育に精魂を傾注している。二番目の娘は、鳥取県倉吉市の倉吉総合病院歯科医院長を夫として、鳥取市で生活を営んでいる。孫は合わせて五人で、家内とときどき長女のいる島原や、

次女のいる鳥取へと出掛け、それぞれの家庭でしばし困らんを楽しんでいる。私も妻も特別身体に異常がないので、毎日元気に過去のすべての御霊に感謝しつつ過ごしている。

五年ほど前に、清津から引揚げた昭和六年生まれのメンバーで結成した昭六会の方々より私に連絡が入り、いろいろと親切に清津時代の資料を送って頂き、懐かしさひとしおであった。すぐに昭六会に入り、年一回の懇親会に参加している。五十数年ぶりに坊主頭の幼なじみと会うことができ、たときは、本当にこのように表現すればよいのか、とにかく一気に時間が昔の清津時代に戻ったように、話の中で様々なあのころの情景が浮かんできて、懐かしさでその夜はなかなか寝付けなかったものだった。

年に一度か二度、次女のいる鳥取市に行くことがある。孫娘と私たち四人で、夏場に鳥取砂丘へキスゴ釣りに出掛けたときのこと。さざ波の打ち寄せる砂浜に立つと、遙か遠くの水平線が目に見

いかばかりであったろうかと考えるとき、二度と戦争をしてはいけない。人の命を戦争のために使うエネルギーがあるなら、それは平和のために使うべきではないだろうか。戦後に生まれ、戦争を知らない大人や子供に、戦争のむごたらしさや平和の尊さ、命の重さを、教育する機会をつくってほしいと日々願っている。

ついこの間、母や兄たちが眠っているお墓参りをしてきた。母の墓に父が眠っている清津の山の土を、一握りでも入れてあげるまでは自分の戦後は終わらないと、合掌しながら思った。

去年の夏、長女が嫁いでいる長崎県島原市に出掛けた日の夜に、花火大会があった。可愛い孫も含め、家族全員と親戚の方々みんな一緒に、しばし夏の夜空の芸術を楽しんだ。空いっばいに広がる色とりどりの花模様や、幾何学的な形のその美観に、ときの流れを忘れていた。そのとき、遠い昔にどこかで同じような光景を目にしたことが、突然まざまざとよみがえってきた。それはあの忌

び込んできた。この海は日本海、そして今も父があの八十八カ所の呼び名のある山に一人淋しく眠っているのかと思い、早く迎えに来てと、私たちが子供が来るのを待っているのではないかと心が焦った。涙で日本海の青い海と白い波が、いつの間にかぼーっと霞んでしまった。

#### 八 清津の悲しい記憶

##### その一

終戦前後のいろいろな映像は私の脳裏に焼きついていて、自分がこの世を去るまで消えることはないであろう。戦争ほど悲惨で残酷なものはない。戦争は、多数の人間の命を一片の良心の呵責もなく、無差別に容赦なく奪ってしまう。冬ごもりのための食糧をせつせと巢に運んでいるアリの行列を、何の感情もなく足で踏みつぶしてしまうように。少年時代に味わった戦争が憎い。父や兄たちの命を奪った戦争が恨めしい。戦後、この感情がずっと続いている。ましてや、外地の戦場や原爆で亡くなった多くの同胞のその瞬間の心の中は、

まわしい昭和二十年八月十三日、戦場と化した清津の町だった。町の周辺の山々に構築されている日本軍の陣地に対し、沖合から雨あられのごとき艦砲射撃。私が避難していた防空壕の山に弾が盛んに落下して、一晩中ドカンドカんとその轟音に眠れたものではなかった。そのときに、ソ連軍が使用していたのが曳光弾だった。赤、青、黄の鮮やかな色の点線が、遙か沖合から我軍の陣地の付近まで無数に飛んでいた。それは、夜間でも弾道が追えるように、光を出して飛ぶ弾の美しい光の点線だったことを、あとから知った。あのときの夜空が、島原の花火の美しい夜空を眺めているときに、彷彿と頭の中に湧いてきた。同じ夜空を仰ぐにしても、六十年前は恐怖の夜空だった。今は幸せで平和な夜空を見ている。その落差はあまりにも大きいような気がする。あまりにもその代償は大きすぎる。多くの国民の命の犠牲によって、今の我が国の平和ができ上がっているのだ。莫大な数の戦没者とその遺族の方々が、無念と悲しみ

の傷跡を今も引きずっていることを忘れてはならない。

話は前後するが、再度終戦当時に思いを馳せてみたい。終戦の翌年の、寒さが残る時期だったと思うが、私は一人で清津の港近くまで行った。税関の裏の所には、構内を走る貨物列車の線路が冷たく光っている。何気なくコンクリートの柵に手を当てて、その隙間から中の方向に目をやると、そこにはすこくもの悲しい光景があった。その日は濃霧で港一帯は冷たく沈んでいた。その中を、二十人くらいの人影がゆらゆらと動いている。何だろうと思つてさらに目を凝らすと、それは武装解除された旧日本軍人の集団だった。肩に大きな木材を担いで、貨車に積み込んでいる。回りには、ソ連軍の兵士が銃を構えながら監視している。よれよれの戦闘帽にボロボロの軍服、元軍人たちはうつろな目で、足元もおぼつかないのか力無くふらつきながら歩いてきた。食べ物もろくにもらっていないのか、全員顔色は蒼白で、その悲惨な姿

の日を思い出す。

終戦から数日後、私たち親子五人はほかの家族と共に、福泉町の西本願寺下にあった小さな民家にいた。ソ連兵が来るのを恐れて、真っ黒な部屋で息をひそめるようにして暮らしていたある晩、銃を持ったソ連兵が、ロシア語で大声をあげながらばたばたと家の中に土足のまま入ってきて、ローソクの火を各人の顔に近付けた。若い女性をあさっていた。障子の向こう側で二十代の女性が捕まり、その体を犯そうとして群がった。「ギャーッ！」と声を出しながら、暴れて抵抗する断末魔の様子を感じた。母は三歳の弟をしっかりと抱き締めて、ほかの三人の子供はその周りをしっかりと囲んでいた。食べるものもなく、ソ連兵に怯えながらの生活はとてつらかった。敗戦国民が味わった一断面であった。

## その二

終戦から数カ月経ったころには、清津の町並みは雪景色になった。仕事が無く家にいたが、明治

に少年の私は思わず息をのんだ。これがついこの間まで世界にその名を轟かせた大日本帝国の軍人だったのかと、国の運命の変わりように、私の頭の中はわけの分からない混乱に陥っていた。内地で帰りを待つ親兄弟や妻たちに今の消息を伝えることもできず、またいつ帰してもらえるのかも分からない現況にあつて、その不安と望郷の念はどれほどだったか。日の沈みかけた港をあとに、これからの日本はどんなになっていくのだろうかと考えながら家に帰った。

家に着くと、母から「どこに行つて来たの」と聞かれたが、今見てきたばかりのつらく悲しい情景が頭から去らず、母に話す気分にならなかった。一カ月ぐらいいしてから再びそこに行つてみたが、もうそこには兵士の姿も貨車もなかった。遠く酷寒の地シベリアに抑留されたのか、はたまた別の所で重労働を課せられているのか、あの日から幾星霜、何人の人が故郷の土地を踏むことができたのか。今でも長崎の港に立つて汽笛を聞くと、あ

町あたりまで一人で出歩いて見た。そのとき、道路の端でソリに乗っている日本人の青年の姿を見つけた。足が凍傷で腐つて歩けずに、足が不自由になって遠い道のりを清津の町まで来たと言っていた。病院を探していたのでどこか探してあげようとしたが、父に一言断つてからと思ひ、その青年を道端に待たせたまま家に戻った。父にその話をすると、父はひどく怒った。「可哀想だけれど、自分たちが生きるだけでも大変なんだ。ほかの人と関わり合いを持つのはやめろ」と言った。すこく悲しく淋しい気持ちになったが、連れに行くのをあきらめた。日も落ちて薄暗くなった明治町辺りを眺めながら、私を待ち続けている日本人青年の顔が、いつまでも頭から離れなかった。その夜は、雪が一段と激しく降っていた。

終戦から初めての冬の清津。私たち子供数人は、ソリで雪遊びをしていた。そこに、朝鮮人が引くリヤカーに乗せられた乞食同然の姿の元日本兵士が来た。息も絶え絶えに寝ころんでいる。薬局を

経営し、医療の知識を持つ昭六会の菱沼さんのお父さんが、すぐ駆けつけて注射をしたが、衰弱が激しかったのか間もなく絶命した。このような光景は何度か目にした。

またある日のこと、日本人会を訪ねてきた元日本兵も、栄養失調のためか顔はむくんで目はくぼみ、髪の毛はぼさぼさですごい形相だった。私の家の壁隣の部屋に食事を与えて寝かせたが、一晩中「うーうー」とうめき声がしていた。朝方行ってみると、冷たくなっていった。名前も故郷の住所も分からぬままに、また一つの大事な命が消えてしまった。父は米俵二枚で莖を作り、その遺体をくるんで、日本人会の人たちみんなで八十八カ所の山裾に埋葬した。スコップで縦横一メートル半、深さ二メートルぐらいの大きな穴を掘って丁寧に埋葬しみんなで合掌したが、山を降りるときには、無言で本当にやりきれない気持ちだった。内地で待つ親兄弟や子供たちは、何も知らずに何年も待ち続けるのだろうか。我が身に置き換えて

つめていた。子供心にも胸が締めつけられた。助かればいいけどなあと思ったが、あとはどうなったのか確かめることはできなかった。間もなく始まった引揚げのときの船の中には、その親子の姿はなかった。戦後六十年の今でも、自分の心の中に後悔の念が残っている。あのときの母親は助かったのか、日本人会の大人に聞くべきだったと。間もなくやってきた北朝鮮の寒い冬を、どんなにして越えることができたのか、またいつ日本へ帰り着くことができたのか、それとも何十年も望郷の念にかられながら北朝鮮の地で土に帰ったのか、いずれか知る由もない。

今までいつも私の脳裏にあるのは、戦争のために多くの同胞が、一瞬のうちに肉親を失った悲しみが実体験としてあることです。もう二度と戦争をしてはいけません。それは何か問題を解決するために、人間の命を道具にしようとするから……。あの坂道を血だらけの母親を乗せた担架のあとを、とぼとぼした足取りで付いていった子供の後ろ姿

みたときに、本当に自分の小さな胸が張り裂ける思いがした。今でも、あの兵士の苦しみの混じった顔をふと思い出すことがある。合掌。

### その三

昭和二十一年夏。福泉町にいたころのことである。近所の坂道に何気なく出てみると、上の方が何か騒がしくなっていた。母も異常に気が付き、そちらの方へ急ぎ足で登って行ったら、ソ連兵や白服の朝鮮人たちが周りでバタバタしている。私には何か事件があったことは分かったが、気持ちが悪くて近付くことができなかった。やがて私の目に映ったのは、全身真っ赤な血で染まった人が担架で運ばれている何とも恐ろしい光景だった。刃物で斬られたらしい。苦しいのか、巻かれた包帯が血で真っ赤になった腕が、波打つように動いているのが見えた。その後ろを、六歳ぐらいの男の子が泣きながら付いて行く。けが人は母親だった。名前は斎藤さん。坂道を下って行く全身傷だらけの母親と、その男の子を私はじっと坂の上から見

を、忘れることはできない。

### その四

三寒四温の北朝鮮の町、清津もその日は晴天だったような気がする。日本人会事務所に行ったとき、外でだれかが「税関の所で飯が配給されるぞー」と叫んでいる。それを耳にした私は、ほかの子供たちと一齐に弁当箱や空き缶を手にして、運動会のように税関目がけて走り出した。頭の中は、もう何も考える余裕などない。とにかく食べ物がある。自分の家族に食べるものを持って帰りたい。人のことなど思わない。早く行かないと人に取られてしまうからと、恥も外聞もなく福泉町から税関まで集団で突進した。やつとたどり着くと、そこには四斗樽によく煮えた濃いお粥が入っていて、白衣を着た朝鮮人がひしゃくで並んだ人に次々とお粥をついでいた。私たちもようやく間に合い、列に並んで空き缶にお粥を入れてもらった。この間約十分足らずの自分たちの行動は、まさに今思えば餓鬼の世界だったが、それを熱いのを我



慢しながら大事に家に持ち帰り、夕方皆で少しずつ分けて食べれば安らぎの世界に浸った。しかし、税関の前で並んでお粥をもらおうとしている私たち日本人を、大勢の朝鮮人が嘲笑しながら見ている。戦争に負けて、国と国の力関係が完全に逆転した結果の現実であった。あのときほど惨めな思いをしたことはなかった。人間にとつて、食べるものが全くないことがどれほど大変なことか。今はまじめに働けば何でも食べられる、いわゆる「飽食の時代」だ。戦前から戦中戦後を生きてきた私たちは、当時の厳しかった食の有様を思い、食事のたびに感謝の気持ちをもいつも抱いている。北朝鮮で生まれ、敗戦を小さな体で体験したあの日からも六十多年も流れてきたけれど、自分の胸の中には多くの事象が走馬灯のようにいつも流れている。いろいろなメディアによって北朝鮮の事情を知ることができるが、ついこの間もテレビで清津の町並みを一部見ることがあった。飢餓に苦しむ子供たち、道端に横たわっているいく

した。終戦直前の戦況不利のあの当時でも、最後は必ず日本が勝利すると信じて学徒動員や教練に励んでいた。しかし、八月六日に広島、九日に長崎へと原爆が投下され、地球上初めて悪魔の爪によって二つの町は焦土と化した。私たちは、ラジオでただ新型爆弾によって多少の被害を受けた、とだけ聞いていた。アッツ島やサイパン、ガダルカナルと次々と玉砕のニュースが放送されたが、よもやこれほど早く敗れ去るとは、私たち子供にはとても予想できなかった。

ソウルの観光バスで、三十八度線の軍事境界線近くの海拔百十八メートルの高地にあるオドゥ山統一展望台に行った。そのすぐ先に、大きな川、漢江がゆったりと何事もなかったように流れている。ガイドが指さす方を見ると、横に長く陸地が川の向こうにあった。その地は決して忘れることのない北朝鮮の山と、遠くに小さく見える町並みだった。ソウルの中心を貫く漢江と、北朝鮮から流れてくるイムジン川が合流するところにある統

つもの死体、泥んこの市場で食べ物を拾って食べたり、盗んだり、その悲惨な状況は目を覆うものだった。今現在のあの町は、殺伐とした様相に変わってしまい、幼い時代のあのころの面影はもう遠くに消え去ったのか。私たちが育った第一の故郷清津の地。冬は厳しかったが友達といつもソリで坂道を雪滑り、また夏場は天馬山下の海水浴、そして周囲の山々で鈴蘭の花を採ってきたり、またあるときは輪城平野の小川でオタマジャクシを手ですくったり等々、楽しかった思い出が数多く、本当に今でもあのころが懐かしい。私だけに限らず全国におられる多数の引揚者の方々も、私と同様な思いをお持ちに違いない。

「おたまじゃくしの輪城川

戦野に染まりし御霊 安かれ」

#### 九 韓国旅行

三年ほど前に、私の男兄弟三組の夫婦で長崎から韓国ソウルに旅行をした。久しぶりに朝鮮語が耳に聞こえたときには、幼いころの清津を思い出

一展望台からは、北朝鮮の開城直轄市板門郡が見えていた。パンフレットを手にしながら望遠鏡のぞくと、北朝鮮の宣伝村、対南放送基地、人民学校、金日成史跡館などの建物が視界に入ってきた。世界でただ一カ所残されている冷戦の遺産で、朝鮮は南北に分断されている。

#### 十 反省

私たち昭六会のメンバーもかなりの高齢になったが、戦前、戦中、戦後を通して一番よく我が国の世情を体験している年代である。この手記を書きながら、手を休めふと外を見ると、六十年前の八月九日の惨劇があった浦上の空が目映った。今は何事もなかったように青く澄んでいる。もう戦争は嫌だと、駄々をこねて泣きわめく幼児のように叫びたい。そしてうわべの平和ではなく、戦争も犯罪もない真実の平和がほしいと願いながら、いろんな世代の人たちと語り合いたい。庭の草木も木々も綺麗に色付き、そして小さな芽も吹いてきた。これからも自分の歳は数えず、昭和一桁生

まれの気概で、悲憤の涙に流されて逝った方々のお陰で今まで生かして頂いた命を大切に、これからも元気に生きていきたい。

最後に、改めてすべての戦争犠牲者の方々に感謝の心を捧げつつ、永久に安らかでありますように祈念するのみである。合掌。

## 昭陽江からオンタリオ湖への流れ

カナダ 小橋川 慧

はじめに

今年、平成十七（二〇〇五）年、私の住んでいるカナダでも、「冬のソナタ」が放映された。このドラマに期待していたのは、昭陽江が流れていた私の知っている春川が出るだろうか、ということだった。春川は、韓国・江原道の道都で、ソウルの北東九十キロメートルの所にある。

ドラマの第二話を見ていて、私は「あつ、あれは！」と立ち上がった。ほんの二、三秒だが、昔と同じ形の小さな春川の駅を見たのだ。六十年前の九月中旬、当時小学校六年生だった私は、おびたらしい数の日本人と一緒に真つ暗闇の春川駅にいた。飼い主を追いかけて駅に来た三十四匹以上の犬が、悲痛な声で吠え続けていた。

日本人専用の客車は、京城（ソウル）に向かう